



テーマ 「教育の未来」 (要旨)

隅田 貫 (すみた かん)
日独産業協会 特別顧問

筆者がなぜ教育を論じるのか？

教育というテーマほど、十人十色の意見が出るものはない。
筆者は結構多様に生きてきた。それも、常に少数派を生きてきた。
生き延びることができたのはなにか。
煎じ詰めると「学び続けた」ことに集約される。
この「学び」は学問に止まらない。
「教育の未来」にいう「教育」は、教室の中の狭義の教育ではなく、「学び、学ぶ」こと全てを包含する。

1. 教育(学び)の「在り方」:世代を問わず求められる今後の役割

(1) 今後の世界情勢における日本の立ち位置

現時点でかなり明確に言えることは

1. かつてない速度で人口が減少する
2. 大陸の隣国との緊張関係が容易に緩和せず、場合によってより高まる可能性もある。
3. 日本企業が30年以上前に時価総額で世界に存在感を示した日々の再来は容易ではない。
4. 自国通貨の将来価値について国民が心配し始めている。

(2) 教育に求められる役割

教育に求められる役割を言い換えるとすれば、自立への道と言って良い。

大学で何を学ぼうとしているのか？

ということにAIは答えてくれない。

本来自分で考え、自分で決断することである。

「自立」して生きる、ということは、自分なりの考え「在り方」を定めて人生を選択することに他ならない。

(3) 教育提供者に求められること

「教育提供者」は「先生」と呼ばれる立場の方々だけを想定してはいない。

どのような立場の人間も、他の人に学び(教育)を提供できる。

意識しているか否かにかかわらず、教育を提供している。

これらの教育提供者に求められることは、正解だけを教えることではない。

教育を提供する側の人間と受ける側の人間には情報量(知識・経験)に大きな非対称性が存在する。

どうしても正解を教えようとする傾向になりやすい。

一人一人の「正解」は異なる。

相手に考えさせることが大切である。

よくロンドンへ出張に行った。

見ると横断歩道に「Look Right!」「Look Left!」と書いてある。

青信号はあなたを完全に守ってはくれるわけではないのだ。

(4) 教育を受ける者に求められること

20年近くドイツで過ごしたが、ドイツに渡った時最初に覚えたドイツ語は「質問はタダ!」という言葉であった。

自分から質問しない限り何も起こらない。誰も自分に興味も持たないし声もかけてはくれない。

外に向かって積極的に学びを得る姿勢。

常に「なぜ?」「そもそも?」を問いかける姿勢、これこそが学び(教育)を受けようとする場合に必要となる。

2. 教育の勘所(世代別)

(1) 未成年

ここでいう未成年は学生(小学生から大学生まで)。

必要なことは、とにかく様々な大人と対話すること。

読者の皆さんは自分の10代を振り返ってみて欲しい。

よく話をした大人は両親、親族、学校や塾の教師、部活の教師。。あたりに止まるのではないだろうか?

社会の第一線で活躍している様々な属性の大人と話していただろうか?

今、私は月一回の頻度で10代の若者たちと様々な属性の大人とのオンライン対話に参加している。

毎回毎回、学生に様々な気づきが生まれている。

大人も学生から前に進む力をもらおう。

学生の反応や話から、違う世代、特に次世代の気持ちを新鮮な学びとして得る。

なにより、学生と大人が対等に話をしていることである。

「対等(対話)」が「学びの未来」のキーワードである。

(2) 社会人(現役)

現役の社会人にとって、学びの目標は「次の10年をどう生きるか?どう自分を活かすか?」という点にある。

決断の支えとなった学びは、いつも「外」にあった。

自分なりの常識を疑う「外」からの学びこそ、転機を決断する力の源泉であった。

これからの時代は世情が前例なき内容とスピードで変化する。

昨日の常識を墨守しては、次の展望などおぼつかない。

学びの将来は、どれだけ努めて「外」の人々とのネットワークを構築できるかが鍵となる。

(3) 社会人(シニア)

シニアの経験値には次世代にとっての価値がある。

問題はその活かし方にある。

時代の流れがゆったりとした昭和の時代であれば、シニアの経験はそれだけでなんら加工することなく次世代が傾聴できたかもしれない。

時代が益々加速する中であっては、シニアであっても常に自分も教育を受ける側であることを忘れてはならない。

自分を押し出さず、押し付けない。

人間にとって学びは一生ものである。

シニアにとって「学びの未来」は新しい「自立」へのロードマップである。

3. 教育の勘所（現場別）

組織なり集合体では、往々にして同調圧力が生まれやすい。
学びの場所について、家庭、学校、企業、いずれにも共通することは、
「学びにあたり、誰も排除しない」ということである。

(1) 家庭

本来家庭は「教育（学び）」の一丁目一番地である。
今後益々多種多様化する情報のシャワーの中で子供の興味・関心が多様化すると共に学び方についても多様化することを、先ず親が理解することが大切になる。
これからの子供は多種多様な情報の中で自分の興味や夢に迷うことが多いのではないか。
子供にできる限り自分で選択させる力を幼少から養うようにしてはどうか。
令和の時代、興味・意識が多感多様になる子供にとって、自分探し、いや自分の居場所探しに迷うことが多くなっているのではないだろうか。
親がこどもを信じ、優れたところも、そしてだらしのないところであっても、飾らず堂々とした生き様を見せることで、子供は十分感じ取る。
親が子供を理解するよりも何倍も早く、深く、子どもは親を見つめ、そして見抜く。

(2) 学校

これからの教育を考える場合、学校はもはや「正解を教える場」だけではない。
「自立」した人間を目指すためには、「教育の将来」において学校が最適なものは人間として対等に議論する場としてではなかろうか。
読み書きそろばんを学ぶことのできる機会と手段（ツール）は今日至る所にある。
教育は将来にわたって義務だが、学校は必ずしも義務ではない。
これからの学校は「通学すること」が目的ではない。
「金融取引は今後益々多様化するが銀行が必ずしもいつも必要なわけではなくなる」
私が銀行員をしていた何十年も前に言われていたことである。

(3) 企業

企業にとって従業員のスキルアップは必要不可欠である。
しかしながら、それをを用いる者の人間性が伴わなければ企業にとって期待充足とはいかない。
この人間性こそが、「自立」である。
かつて昭和の時代、企業が欲していた人材は「良質の白紙」。
令和以降の将来に必要な人材は、優れて自立した自主的な人材である。
いわゆるブルーオーシャン目指してチャレンジのできる人材こそ求められる人材に他ならない。
企業における「教育の将来」は従業員の士気向上>>自主性向上>>「自立」にある。
そのためには「問い詰め」ではなく「問いかけ」がコミュニケーションの主体となる。
「外」での「修行」も欠かせない。
黙っても転職は活発化する。かわいい子には思いつき旅（転職でも出向でも他社研修でも）をさせ、戻って来る人間を一人でも増やすことが今企業に求められる「教育」ではなかろうか。

4. 明日への提言

教育が将来目指すべきものは

*依存から自立へ

*問い詰めから問いかけへ

*忖度ではなく選択を！

*上司も医師も教師もすべては役割であって人格ではない。

人間は年齢・性別・肩書・国籍等々とは無関係に対等である。

対等であるからこそ対話が成り立つ。

*外へ、外へ！

組織（国家）の枠組みが機能するには、構成するメンバー（国民）の自立があってこそ。

明日からと言わず、今日から行動してみたい。



(詳しくは本文 <https://theoutlook-foundation.org/archives/1313> をご覧ください。)

執筆者紹介

隅田 貫 (すみた かん)

日独産業協会 特別顧問

キーワードは金融業務と人材育成、そしてドイツを軸とした海外経験。

82年東京銀行入行（当時、現在の三菱UFJ銀行）

為替資金業務（20年近く）を軸に長く海外拠点に勤務。

ドイツ（10年以上）、他スイス、香港にも数年駐在。

05年にドイツ老舗プライベートバンク本社に初の日本人として入社。

14年に帰国、金融のみならず人材育成についても独自の視点で活動。

講演や研修と共に働き方の日独比較を軸とした著書を出版。

ドイツでの経験（20年）を活かし日独産業協会特別顧問として、日独ビジネスパーソンの交流にも尽力。



当財団では、第一線で活動される気鋭の執筆者に依頼し、時代を拓く提案、提言をニュースレターとして発信しています。ご意見をおよせください。

財団事務局 abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

一般財団法人 未来を創る財団：<http://www.theoutlook-foundation.org/>

© 2022 The Outlook Foundation. All rights reserved.